

浅間山の火山活動解説資料（令和元年9月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

8月26日以降、噴火は発生していません。

9月14日以降、8月7日、25日の噴火前と同様に低周波地震が減少し、火口周辺の微小な地震が増加しています。山体浅部で不安定な状況が続いていると見られることから、再び小噴火が発生する可能性があります。一方で、地震活動や地殻変動観測からマグマ上昇を示す変化は認められず、中噴火が発生する可能性は低いと考えられます。

山頂火口から概ね2kmの範囲では、引き続き弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和元年8月19日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）へ引き下げました。その後、警戒事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況（図1、図2- 、図3- ）

8月26日以降、噴火は発生していません。

山頂火口からの噴煙は白色で、火口縁上400m以下で経過しました。

火映は2018年7月19日以降、観測されていません。

- ・火山ガスの状況（図2- 、図3- ）

今期間に実施した火山ガス観測では、二酸化硫黄の放出量は、1日あたり60～200トンとやや少ない状態で経過しました。

- ・地震や微動の発生状況（図2- ～ 、図3- ～ 、図4、図5、図6、図10）

8月7日、25日の噴火では、噴火前に低周波地震（BL型）が急激に減少し、山頂付近の観測点のみで観測される微小地震は増加しました。噴火後、やや高周波地震（BH型）が一時的に増加するとともに、低周波地震が再び観測されるようになりました。

14日以降、8月7日、25日の噴火前と同様に低周波地震が減少し、山頂付近の観測点のみで観測される微小地震も7月末以前よりも多い状況で推移しています。

火山性地震の震源は、山頂直下の海拔1～2km付近、及び山頂やや西側の海拔0km付近に分布し、特段の変化は認められません。

火山性微動は、9日までは振幅の小さなものが1日あたり3回以下と概ね少ない状態で経過していましたが、10日以降は観測されていません。

- ・地殻変動の状況（図7、図8、図9）

傾斜計及びGNSS連続観測では、深部からのマグマ上昇を示す地殻変動は認められません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

今回の火山活動解説資料（令和元年10月分）は令和元年11月11日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。



図1 浅間山 山頂部の状況
(上：鬼押監視カメラ（9月15日） 下：黒斑山監視カメラ（長野県）（9月25日）)
・今期間、白色の噴煙が火口縁上400m以下で経過しました。

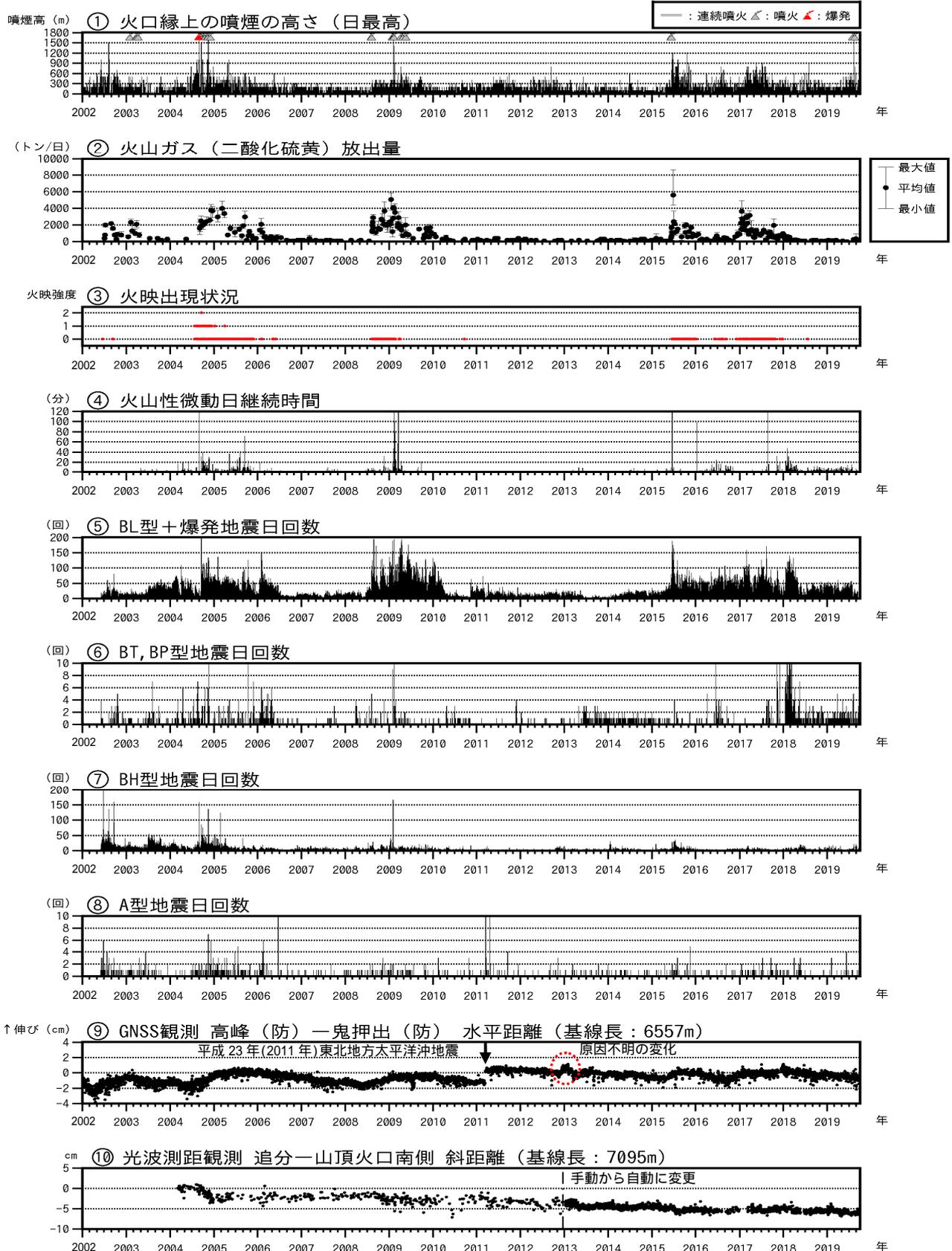


図2 浅間山 火山活動経過図（2002年1月1日～2019年9月30日）

図2及び図3の説明

計数基準は石尊観測点で最大振幅0.1μm以上、S-P時間3秒以内、火山性地震の種類は図10のとおりです。

図2、図3 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。

図2、図3 赤印は火映を示します。強度については、以下のとおりです。

- 0：肉眼では確認できず、高感度の監視カメラでのみ確認できる程度
- 1：肉眼でようやく認められる程度
- 2：肉眼で明らかに認められる程度
- 3：肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度

図2、図3 2012年7月31日まで 気象庁の高峰 - 鬼押観測点間の基線長（基線長7417m）。

2012年8月1日以降 防災科学技術研究所の高峰 - 鬼押出観測点間の基線長。

2010年10月及び2016年1月に、解析方法を変更しています。

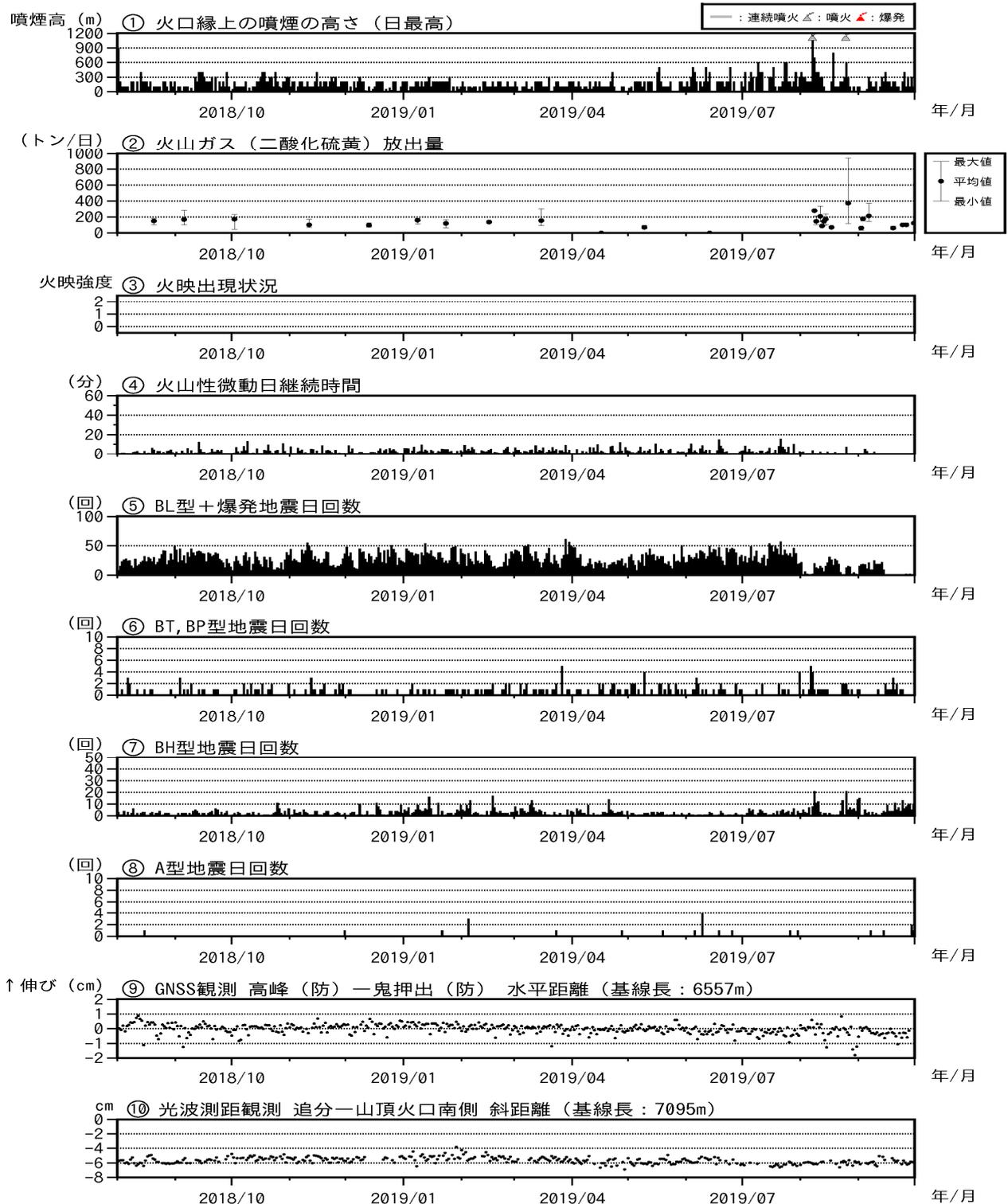


図3 浅間山 最近の火山活動経過図（2018年8月1日～2019年9月30日）

図の説明は前ページに掲載しています。

- ・ 山頂火口からの噴煙は白色で、火口縁上 400m以下で経過しました。
- ・ 火山ガス観測では、二酸化硫黄の放出量は、1日あたり 60～200 トンとやや少ない状態で経過しました。
- ・ 火映は 2018 年 7 月 19 日以降、観測されていません。
- ・ 火山性微動は少ない状態で経過しています。
- ・ 8 月のはじめころ、噴火前に BT 型および BP 型の地震がわずかに増加しました。
- ・ 深部からのマグマ上昇を示す A 型地震の増加は認められません。
- ・ GNSS 連続観測では、深部からのマグマ上昇を示す地殻変動は観測されていません。

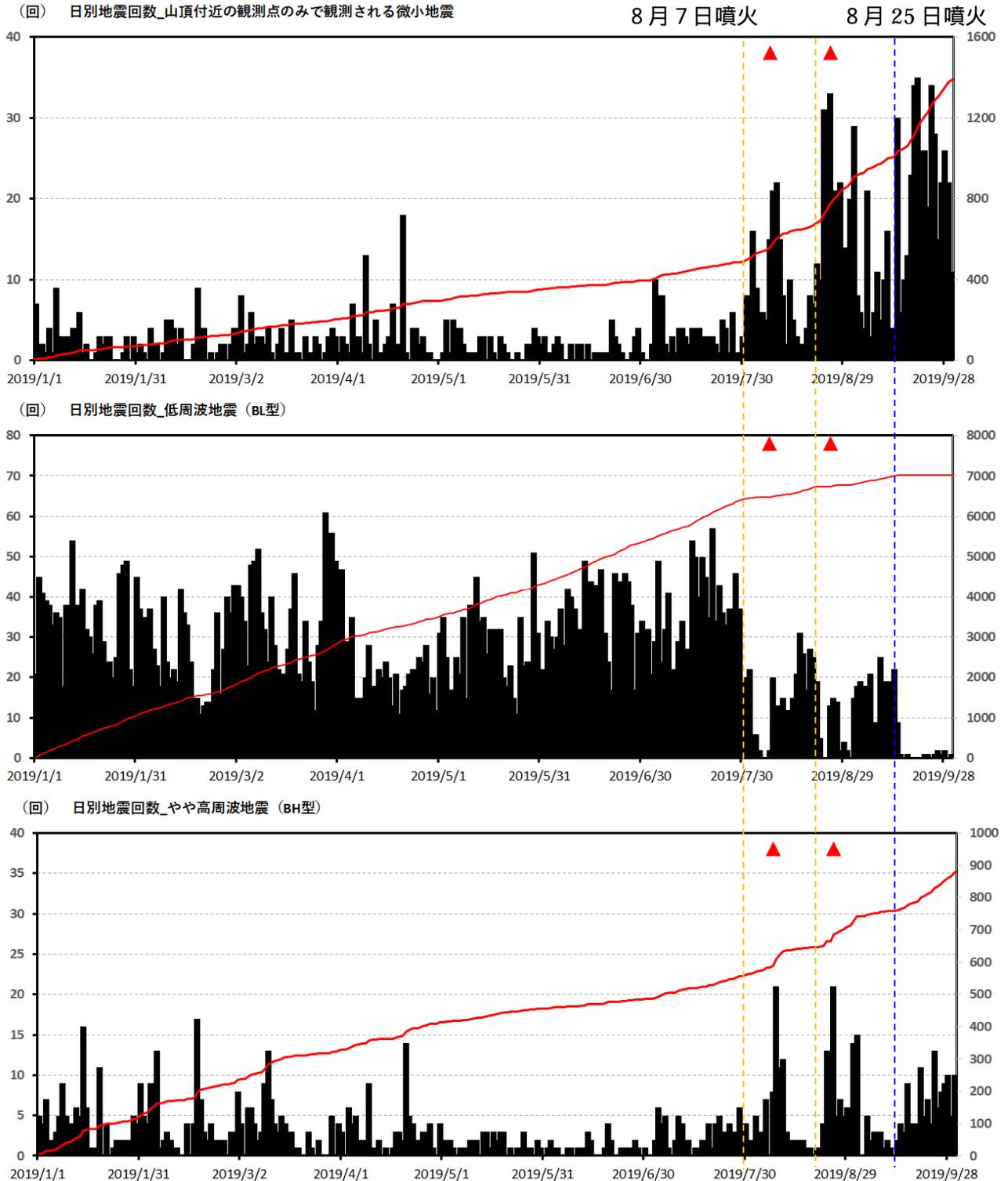


図4 浅間山 火山性地震の発生状況（2019年1月1日～9月30日）

上段に示す「山頂付近の観測点のみで観測される微小地震」とは、図4中段、下段、図2および図3の～に示される火山性地震よりも振幅が小さく、振幅が計数基準（石尊観測点で最大振幅0.1 μ m以上、S-P時間3秒以内）を満たさない地震のうち前掛西観測点の上下動成分が0.5 μ m/s以上の地震です。赤色線は積算回数を示し、右軸で表されます。赤三角は噴火を表します。

- ・ 8月7日、25日の噴火では、噴火前に低周波地震（BL型）が急激に減少し（橙破線）、山頂付近の観測点のみで観測される微小地震は増加しました。噴火後、やや高周波地震（BH型）が一時的に増加するとともに、低周波地震が再び観測されるようになりました。
- ・ 14日（青破線）以降、8月7日、25日の噴火前と同様に山体浅部を震源とする低周波地震が減少し、山頂付近の観測点のみで観測される微小地震も7月末以前よりも多い状況で推移しています。

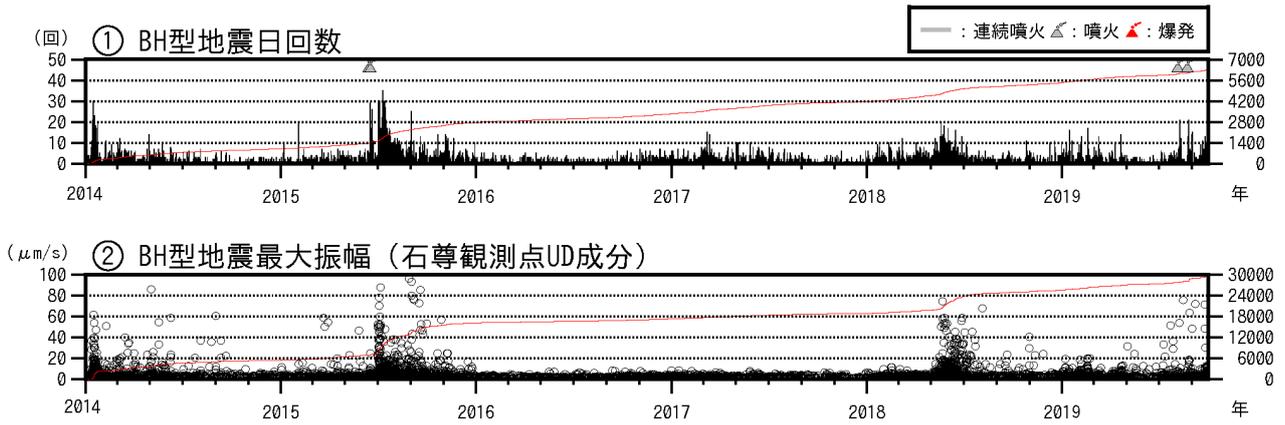


図5 浅間山 BH型地震の日別回数とその最大振幅（2014年1月1日～2019年9月30日）

赤線は、それぞれ積算量を示し、右側の軸になります。

- ・2015年の火山活動が活発化している期間では、BH型地震の増加が見られました。
- ・BH型地震は、8月7日および25日の噴火後に一時的に増加しましたが、少ない状態で推移しています。

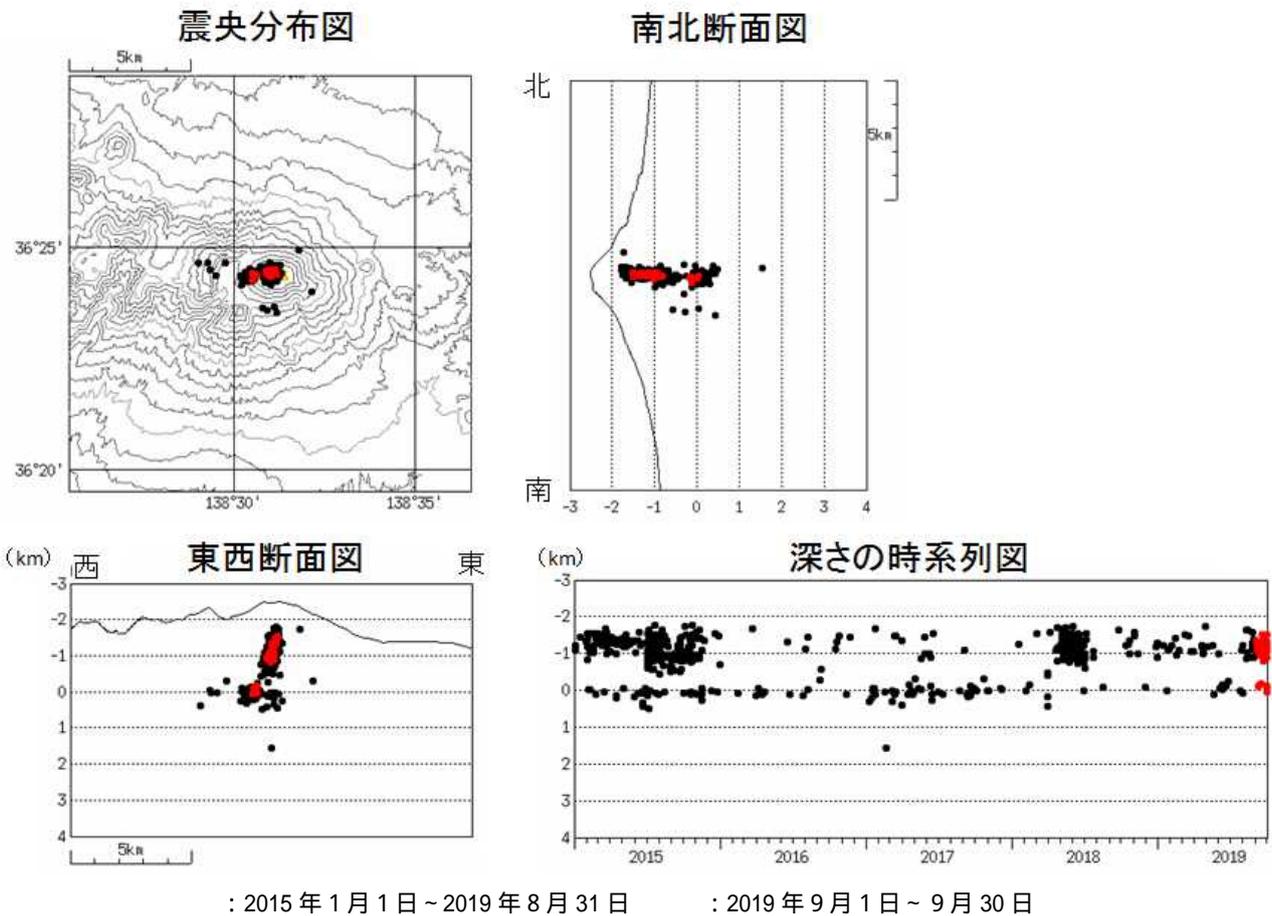


図6 浅間山 震源分布図（2015年1月1日～2019年9月30日）

- ・火山性地震の震源は、従来から見られている山頂直下の海拔0～2km付近、および山頂からやや西側の海拔0km付近に分布し、特段の変化は認められません。
- ・深部からのマグマの上昇を示す地震の増加は観測されていません。

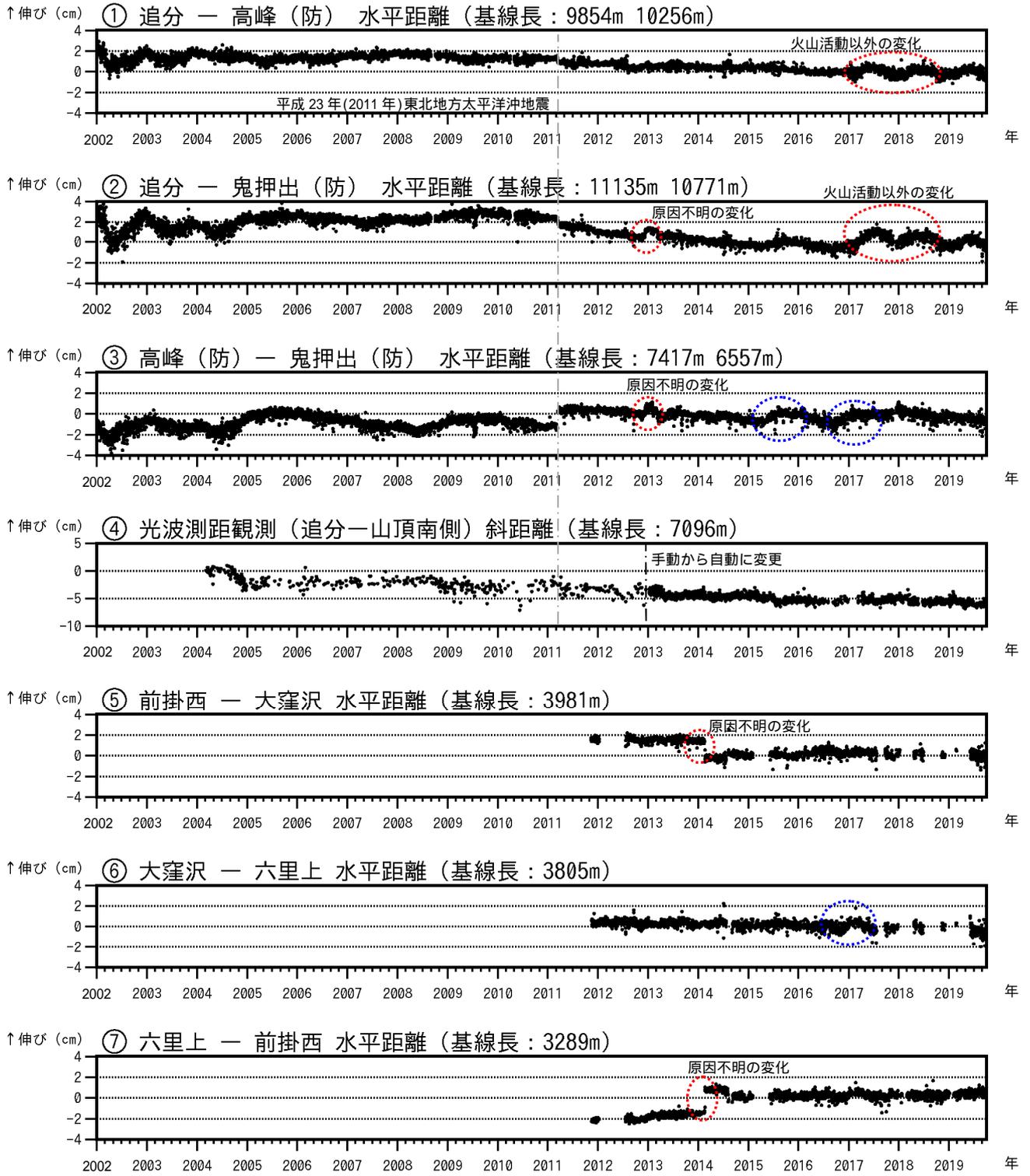


図7-1 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測の結果(2002年1月1日～2019年9月30日)
2010年10月及び2016年1月に、解析方法を変更しています。

(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所

～ は図8の ～ にそれぞれ対応しています。

追分観測点は、2016年12月に移設しています。

2002年1月1日～2012年7月31日 気象庁の高峰 - 鬼押観測点間の水平距離。

2012年8月1日～ 防災科学技術研究所の高峰 - 鬼押出観測点間の水平距離。

～ の空白部分は欠測を示します。

・ の基線で、2015年5月頃から10月頃にかけて、及び2016年秋頃から2017年3月頃にかけて、山頂西側のやや深いところが膨張源と考えられるわずかな伸びの変化が見られました（青破線）。

・ 現在は深部からのマグマ上昇を示す地殻変動は認められません。

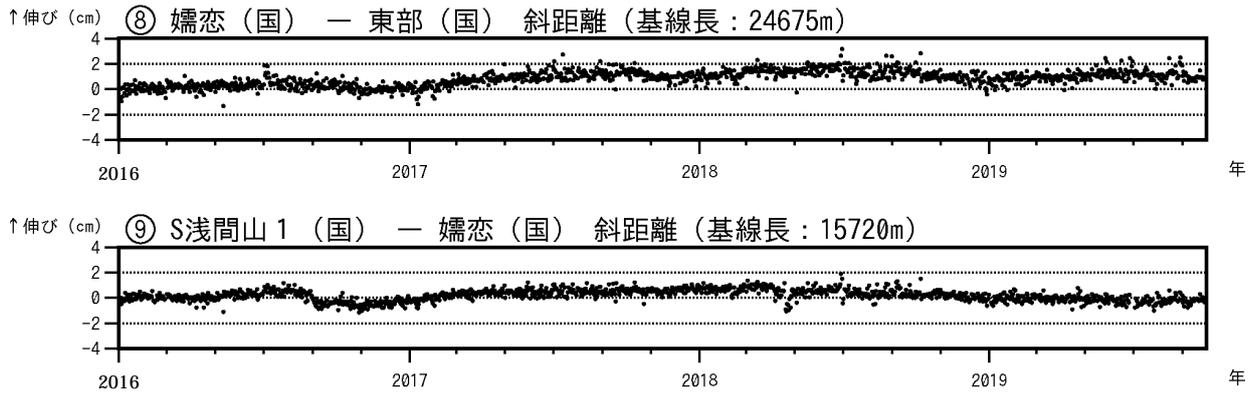


図7 - 2 浅間山 GNSS 連続観測結果(2016年1月1日~2019年9月30日)

(国): 国土地理院

- 、 は図8の にそれぞれ対応しています。
- 、 の空白部分は欠測を示します。

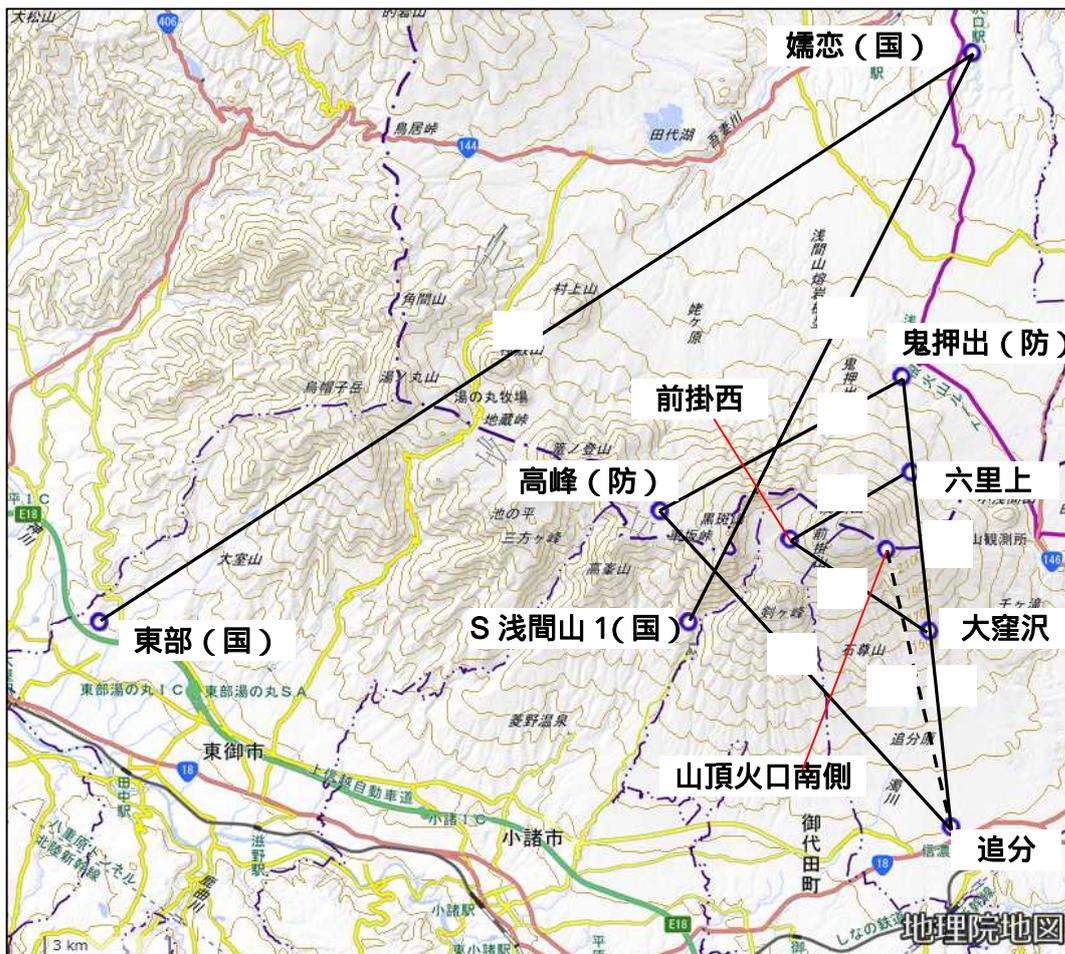


図8 浅間山 地殻変動連続観測点配置図

(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(国): 国土地理院

GNSS 基線 は図2、図3の に対応しています。また、GNSS 基線 ~ 及び ~ は図7の ~ 及び ~ にそれぞれ対応しています。

光波測距測線 は図2、図3の 、図7の に対応しています。

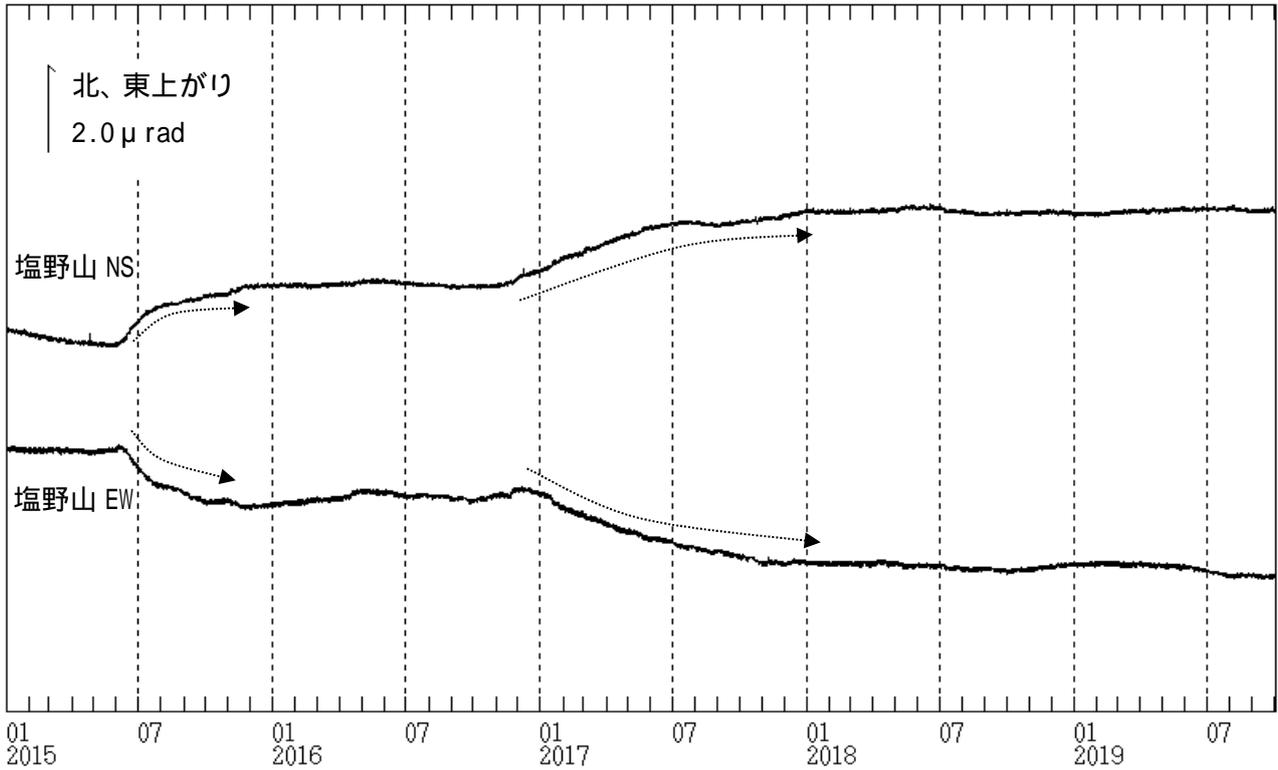


図9 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ（2015年1月1日～2019年9月30日）

*データは時間平均値を使用しており、長期にわたるトレンドを補正しています。

- ・2015年6月上旬頃から山頂西側のやや深いところが膨張源と考えられる緩やかな変化が見られました。
- ・2016年12月以降から2018年1月にかけて、2015年と同様の変化が見られました。
- ・8月7日、25日の噴火前後で、顕著な変動は観測されておらず、深部からのマグマ上昇を示す地殻変動は認められません。

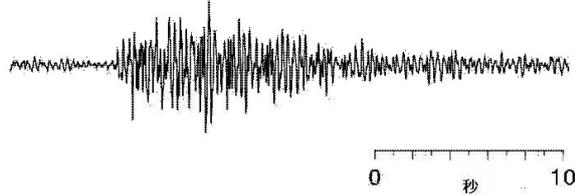
A型地震：P,S相が明瞭で卓越周波数は10Hz前後と高周波の地震



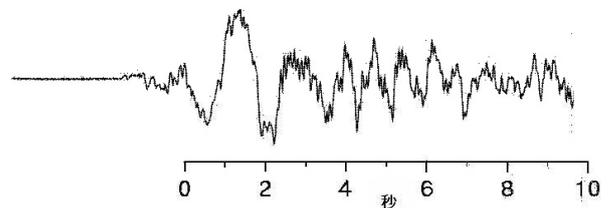
BL型地震：P,S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以下の地震



BH型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以上の地震



EX型地震(爆発型)：爆発的噴火に伴って発生する地震



BT型地震：一定周波数の振動がゆっくりと減衰していく地震

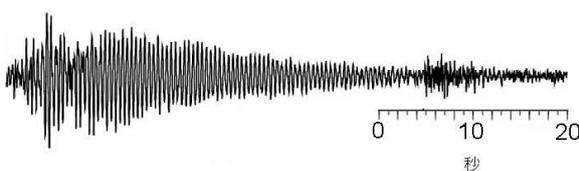
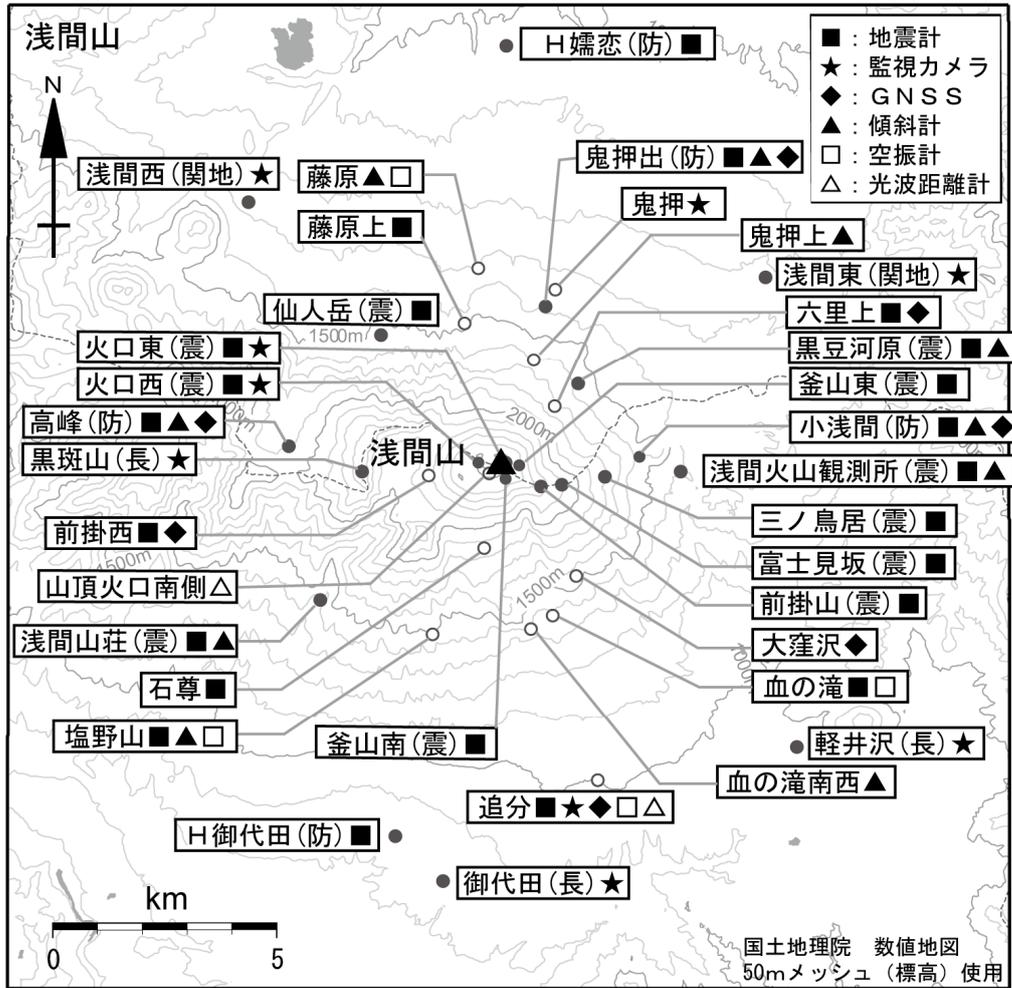


図10 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例



小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所、(震) : 東京大学地震研究所、
 (関地) : 関東地方整備局、(長) : 長野県

図 11 浅間山 観測点配置図